

あきる野の河川敷は、どんな季節でも「いいね」と思う場所です。きっと、同意見の方が多くでしょう。川の流れる音が癒やしてくれる場所であり、広い空や生き物の鳴き声、色鮮やかな植生環境はやはり最高です。私が10年以上調べた結果、125種類とかなり多い野鳥の数を確認している河川敷の環境は、魚類や昆虫類なども豊富で、実に多様に溢れている楽園です。

その中で、代表となる秋川や多摩川などの川は多面性を持っています。季節を巡り、様々な価値観が混在する場所でもあるため、人間活動は重要な多様性に影響を与えてしまいます。よく見ると、生き物の採集、多数の外來種、テグスなどの支障物の存在、滑走路も作られ空を飛ぶラジコン飛行機、トビやカラスへの餌付、地域ネコ屋敷、焚火や野焼きなど…エアガンで遊ぶ少年まで見たことがあります。また、不法投棄問題などもやはり相次いでいます。残念ながら自然がこれらの負担を受けているようです。しかし、短いスパンでは感じられないかも知れませんが、みんなの馴染みの「河原」の環境は少しずつ変わって行きます。昔の河原はどんな感じだったのだろうと、数十年前の白黒写真を確認できる程度で、後は想像するしかありません。

そんな市の河川敷ですが、令和元年の台風19号の後、大きなダメージを受けました。しばらくの間はガレ場だった場所は、日本の自然の回復力に驚くほど植生環境が復活し、見事にきれいなススキやオギ原が広がるようになった場所もあります（オオブタクサなどの外來種も復活した一方です）。それに伴い、数年間もあまり見られなかったオオジュリンやホオアカなどの小型の野鳥があきる野に飛来しました。また、今シーズンは寒波の影響か、1月の頃はカワウやダイサギの大群れもやってきました。多摩川合流点周辺で100羽程度のカワウの群れがぐるぐると旋回する場面を何度か確認しました。秋の渡りでこれだけの群れが見られますが、真冬ではあまり見ていません。急増したこれらの大型の野鳥により様々な被害の事例があるため、少し気になるのですが、冬の厳しさなどの影響により過ごしやすい環境を探し求める野生動物には罪はないでしょう。やはり、河原は人と野生生物、みんなの場所であるべきことを自然に教えられているかも知れません。（パブロ）

**写真** 寒い中、多摩川で休み中のカワウの群れ（その一部）の様子。もう少し上流は、ダイサギやカラスの大群も、それぞれでスタンバイしていました。

